

■飯田高松高校スタートのころ

断想の往時

今川雅晴 (高2回)

選挙運動

新制高校移行二年目。校名は「飯田東」から「飯田高松」へと目まぐるしく変わる。

昭和二十四(1949)年四月。四千二百戸余りを焼き尽くした大火から二年経ち、道幅がやけに広くなった飯田の街並は曲りなりに恰好が付いて来たが、生家の二階はまだ粗壁のままであった。

夜九時を少し回っていたか、階段の下から母が、「井上先生がおいでになったに。すぐに下りておいな」と、甲高く、呼び立てる。

どたどたと店へ下りる。店先に井上アボ(蛇)先生が、身じろぎもせず立っていた。

「遅くに急にやって来て、どうもすまない。あさって十一日のことで……」



●いまがわ・まさはる
昭和6年旧飯田町中荒町生まれ。同19年飯田中学入学。同25年飯田高松高校卒業。中大法学部卒後の同29年国民金融公庫に入社。21年間在職。平成10年から無職年金暮らし。横好きの親世流謡曲は暦のみ40年。芝居見物、映画館通いは今も続行中。

言い終わらないうちに、

「第一志望は無論先生。第二は迷ったけれど、鹿間先生にしました」

と、きっぱり断言した。

アボ先生はほっとしたのか、きびしかった目元が和らぎ、熱い両唇も緩み、

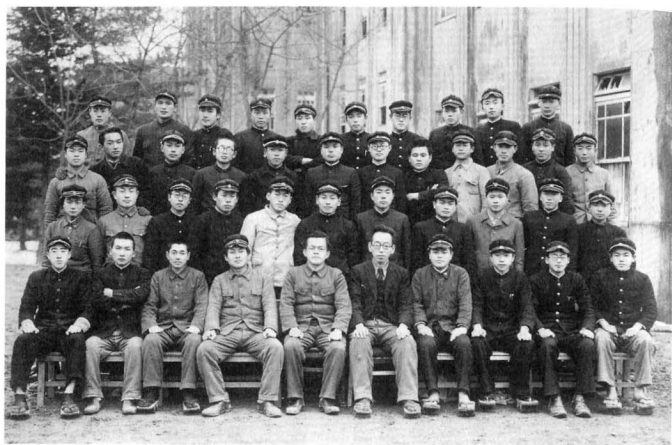
「どうもありがとう」

軽く頭を下げると、「お上がりて、お茶でも……」と引き留める母にも一礼し、

「夜分のこと、またいずれ伺います」

と言い残して、踵を返した。まだ、これから他へ回るのでろうか。先生もラクじゃないと同情した。と同時に、今夜のことは金輪際口外してはならないと、自分自身に言い聞かせた。

この年、ホームルームの担任教師を私たち生徒が決め、



ゲタあり、靴ありの3年A組卒業記念（昭和25年3月）筆者は2列目、左から2人目

その結果に基いてクラスを編成するという、空前絶後の措置が実施されることになった。

前日八日、AからEまで五クラスの担任名が発表された。いかなれば「公示」である。

A井上（国語）にはじまり、以下、市瀬（ウラナリ・英語、ドイツ語）、鹿間（タック？ 地学）、温田（ナマス・体育）、山田（韓名不詳・歴史）の五先生。十一日に、第一志望と第二志望の教師名を記名投票する。翌十二日、その結果に従って、各自のクラスが決定するという段取り。

「今川はアボさには一番もてんだから、なんたって一はアボ。俺もまあまあ悪くなかったのでまずアボ。二人目に困っちゃうな」

中島千足（同期生は敬称略）、久保田ケイマ（警之助）それに竹島茂生らが、わいわいと話し出すと一向に止まない。

第一志望はアボさ、これは不動だが、二人目指名はいささか考えた。鹿間先生は十一年生（高一をたしか小学校一年から起算してこう呼んでいた）の前年、選択した地学を教わったが、授業はテキストそこ退けの脱線しきり万華鏡の面白さ。「好きな作家をあげよ」との質問に、ちよつと気取って「泉鏡花」と答えると凄く誉められた。それ以来、教室外でも気楽に話をするようになり、捨て

難い。

温田先生も、体育からきし駄目、授業エスケープしてアメリカ映画専門「銀星会館」へ堂々赴くのを見て見ぬ振り。それでいて評点「C」をくれた恩義がある。

山田先生は淡々色の無い人柄であるうえ、「秀」をくれた大恩人。しかし、なんとなく物足りず。市瀬先生のドイツ語は魅力充分であるが、なにせ中学一、二年、物理を教えてもらった苦い記憶。理数系は私には異次元の世界であるから避けた方がよからう。

消去していくうちに、第二志望は鹿間先生となる。先ずは一件落着。

十一日になった。

こういう方法で投票したのか、今から半世紀余りも前のこと、確とした記憶は蘇って来ない。多分、与えられた封筒へ記名した投票用紙を封入、私たちのクラス（十一年生当時のままの）へは、井口ドンブリ先生だか坂井オレキ先生だかが回収に来たようだとしか思い起こせない。

翌十二日開票、即日クラス分けが発表された。天の配剤の妙というべきか、はたまた修正作業がよろしかったのか、五つのクラスそれぞれの生徒数には、いささかの凹凸もなかった。

この「担任選挙」は定着することなく、二年後には行

われなくなった。当時、私は「これぞ生徒の人格尊重にして、正に学園民主主義である」と当然視していたのだが、時勢は就に「上からの統制」復活に向って動き出していたのである。

教唆記

平成十一（一九九九年）十月十七日。同期生五十三名、別所温泉「花屋」のレトロな大広間に居並ぶ。乾杯が終わって二十分。席を立ち回避する手合が徐々に増える。

並び幹事の一員として、入口近くに岡村や湯沢に挟まれて、もっぱらビールを傾けていると、スーツにループタイが若作り、ネームプレートが取れていて誰だか直ぐ思い出せぬ村夫子が、ビール瓶を差し出し、

「今川はちつとも変らん。僕、葛岡。引き揚げ編入して二年後に小石川高校へ転学。だが飯田の卒業名簿に名前あり。最近、飯島町へ引越したので、はじめて出席」

「二重国籍はさら。それにしてもなつかしい」

そう答えると、一気に彼は喋り出す。昭和二十二、三年の文学クラブ乱立のころ、葛岡が主軸の「白い陽炎」（高一回毛利さんリード）「せせらぎ」さらに「円形劇場」「濁流」と、雨後の筍の体で互いに張り合った。

「お前さんが「せせらぎ」に書いた「仮宿」、僕の方へ



同窓会で一堂に会する（平成14年7月）

載せた。多情多感”はずい分ませていて大人の小説だった”

葛岡も引き揚げ談や初恋話を少々気取った文章でものしっていた。文学クラブ看視役は木下ツネちゃ先生。独身で年齢差が少なかったから、宿直の晩は密造どぶろくを飲み、私たちには才能充分あり、芥川賞の候補になった小谷恒先生に続けと、さかんにハッパをかけた。

詩集『焦土に立ちて』を就に処女出版していた小林秀雄（後年、武田太郎と称す）はその煽りにすっと乗った一人。早大仏文卒業後、家業のハイヤー会社の収益のあらかたを注ぎ込んで、ベダンチックな民俗学の関係書を二点刊行した。

「小林は二十年ほど前に急死したよ」
そう教えると、葛岡はしばし絶句した。

敗戦後の三、四年間は、疎開・引き揚げなどで、私た

ちに教鞭を取った教師は多士済々、極めてユニークな人が多かった。

ピアノストとしても一流に位地した安藤仁一郎ウサギ先生は、個人レッスンも施した。「撃沈」「空の神兵」などの軍歌は、敵性音楽と目の仇にしたジャズリズムたっぷりとして語ってくれた。この人の感化で音符の世界へ入ったのが、木下文彦、宮内宏だと私は考えている。

煽動と誘惑にかけての「真打」は、やはり鹿間先生にとどめを刺さざるを得まい。

地学の授業はしつちやかめつちやかだったが、その多知識博学に酔わされた者は多い。パリへ行かんと画伯の道へ突き進んだ近藤信道に始まり、地質学一筋に生きた山田哲雄（平成十年死去）、本多勝一も多少はそのエーテルを嗅がされた一人だろう。

先日、ニホンオオカミの骨格発見のニュースあり。テレビ画面で六年ぶりに長谷川さんにまみえることが出来た。その瞬間、平田会長が、過日いみじくも洩らしたひとこと、「同期の長谷川が、横浜国大へ進み、今の古生物の世界にはまったのは、鹿間さんに誑かされたためだと言っている」

その弁を思い出し、とうとう鹿間先生は狂人扱いになったのかと、おかしかった。